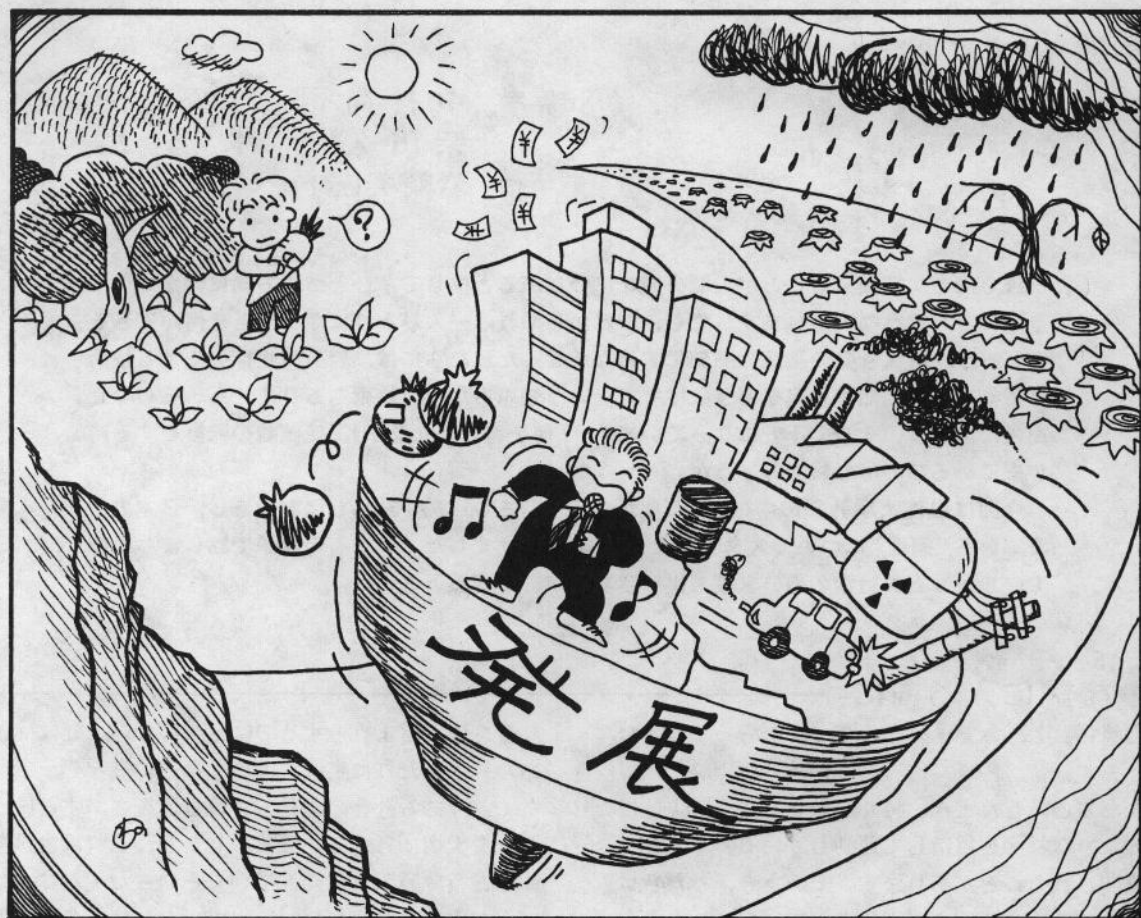


# Trial & Error トライアル・アンド・エラー No.104

試 行 錯 誤



## 特集 日本の病理と第三世界

|                             |    |
|-----------------------------|----|
| 中村尚司さんを囲んで — 日本の病理を語る ..... | 1  |
| ●久しぶりの日本で感じたこと              |    |
| ●これはSFだノ .....              | 4  |
| ●生活ってなに? .....              | 8  |
| ●東京雑感 .....                 | 12 |
| ●第三世界の理解のために .....          | 16 |
| JVCにゆうす .....               | 18 |
| 小さな地球・大きな環境問題 第4回 .....     | 20 |

## 「日本の社会病理」を語る

出席者 中村尚司 岩崎駿介  
柴田久史 林達雄  
進行 岩崎美佐子〈岩崎(美)〉

森も海も、征服することが人間の幸せにつながると信じて、ひとつの方向に向かいつつ走ってきたような気がします。でも、群れから離れ、一人ひとりになったとき何ができるでしょう。巨大社会の歯車の一部にすぎなくなった私たちには、自分の生存を支える技術は皆無です。自然から何をどう収穫するという知恵もなく、技術ありません。そのくせ高慢に居直り、そして不安になっています。「何を喜びとするか」、価値観の転換をする時が来ているのではないのでしょうか。

今回は龍谷大学教授の中村尚司（なかむら ひさし）さんをJVCにお招きし、日本の抱えている“病理”についてスタッフと語る場を設けました。いつもの調子で話したので、ちょっとお行儀の悪い言葉も出てきますが、ご容赦下さい。

### ●議論に入る前に

岩崎(美)：司会ではなく、進行役をやらせていただきます。昔、PARC(アジア太平洋資料センター)の人たちと話したとき、村井吉敬さんから「JVCはどのような社会を目指して運動しているのですか」と質問されたことがあります。そのとき、私たちは、社会はこうあるべきだと目指していない、あるべき社会を考えてそれを実現しようとするという考え方はおかしいと言いました。中村さんは、会社社会という仕組みが日本に破綻をもたらし、第三世界を傷めつける構造を生み出していると説明なさっていますが、では会社社会をどう切り崩すか、第三世界からなにを学びどう生きていくのか、自分たちの生き方を通して社会はどうなるのか、ザックバランにお話していただければと思います。

中村：若い頃こういう生き方をしたいと思っていたのに、50歳を越えた今となってみますと、あるべき姿を意識して生きていくのは不可能というか、そのように生きてこれなかったというのが正直なところでは。あるべき社会をデザインして、それにそって

社会を建設しようとするのは意味がない。では行きあたりばったりに生きればいいのかということではなく、今ある社会のあり方と違う道をさがすということを大切に考えています。しかし、それは世界全体をどういうふうに変えていくといったそんなおおげさなものにならない。

具体的に言うと、以前、私が病気になる前に岩崎さんと話していたときに、私はボランティアはうさんくさい、うさんくさい生き方をせざるをえないものだとい生懸命言ったら、間違いというか表現が不適切だと指摘されたので(笑)、思い直してボランティアは実質的に、あるいは定義上、二重生活をせざるをえない人であると、そのときは訂正したわけです。しかし、病気になってから考えてみますと、二重生活者だけでなく、多重生活者、一人二役だけでなく、三役四役五役と多様な生活を生きることを引き受けるのがボランティアであって、最小でも二重生活をしなければならない。二重生活をするのが会社社会を作り変える力になるんじゃないか。したがって

うさんくさいボランティアにこそ可能性があると思います。私自身も、学校教師にとどまらないで、なんとなくいろんなうさんくさいことを始めてしまいまして、したがって一人二役三役、ときには七役などという気持ちでいるわけですが、その最低でも二つの生き方がどのような関係になっているかというのは考えなきゃいけない。そのへんを鍵にして、今日はあるべき私たちの活動を考えられるんじゃないかと思っています。片方が会社で片方がボランティアというごく特殊な二重生活だけではなく、もっといろんな形を追求した方がいいでしょう。

岩崎：ちょっといいですか。今日はこれはなんなの(笑)? 座談会なの? なんのテーマについて話し合うの? 僕は全然聞いてないんです。中村さんだって聞いてないでしょう。

中村：聞きました僕は。あるべき社会をどういうふうにかえるのかというふうに議論しますと……。

岩崎：は一ん。

岩崎(美)：テーマは「日本の社会病理と第三世界……」。

岩崎：全然違うじゃない。あなたがさっき言ったことは、「第三世界に学びながらなにを目指すか」ということでしょう。「第三世界に学びながらなにを目指すか」ってことと「日本の社会病理と第三世界」では全然話することが違いますよ。僕は日本の社会病理というから、日本社会がいかに病気になるのかをはっきりさせるのがまず目的だと思ったんです。「サラワ・キャンペーン委員会」の発足式のとき、中村さんが日本社会の行き詰まりを的確に述べていられたけれど、そういうことを言って、それが第三世界とどうつながっているか構造解析的に明らかにする、具体的に社会病理とはなにか、肥満という現象か子供のアトピーか、社会の病理と個人の病理をみんなで勉強しながら、やっぱりこれがというように議論を展開すべきなのに、そこのところが全然はっきりしていない。

岩崎(美)：昨日、どんな切口でやるのか、林さんと少し話したんです。たとえば死生観をどうとらえるのか。というのは日本人は死を恐れすぎている、テレビの番組なんかにも死や老いが多すぎる。切り口の候補はいくつかあったんだけど、まあ話していれば



中村尚司 (なかむら ひさし)

熱帯林保護やスリランカ人花嫁の救済にのり出す行動する学者

龍谷大学経済学部教授

著書に『いのちと“農”の論理』、『豊かなアジア、貧しい日本』

(ともに学陽書房)

なにか出てくると思って……。

岩崎：基本的にはいまのボランティア論でもいいんですよ。2時間話せますよ。しかし、ボランティア論でやるのかどうかははっきりさせなきゃきりがないよ。僕は硬く考えすぎるところがあるかもしれないけれど、どんどん勝手にしゃべるのはお酒の席ならいいんだけど、それなら酒でも出してくれといいたいいよ(笑)。

林：昨日、若干話したんですけどね、確かに第三世界と日本の病理ってニュアンスだと、岩崎さんがさっき言われたように日本の病的現象をどんどんあげて、それは生活の手足を第三世界に依託しちゃったためにそのようになっているとか、あるいは逆に言えば、そのために日本ではノイローゼが発生したけど、第三世界では死に至るもっと厳しい状況になっている。そういう話かなと僕は思ったんだけど、美佐子さんと話していたら、どうも狙っているところはもっと別のところみたいで(笑)……。

岩崎(美)：私が思ったのは、確かに日本の病理を明らかにしなきゃならないんだけど、企業型というか利益のみ追求型というか、経済優先型の社会をもっと分析しなくちゃいけないんだけど、そうではない社会っていう……。

岩崎：それではまさに村井吉敬氏の言うように、目指すべき社会に現実をあてはめようってことじゃな





岩崎駿介 (いわさき しゅんすけ)

JVC代表

筑波大学助教授

専門は都市計画、都市デザイン

いか。どういう社会がいいかを議論しましょうってこと？

僕はこの「日本の社会病理と第三世界」というのは皮肉っぽく、おもしろく議論できると思ったんですよ。要するに半分斜に構えていいわけ。こんなことやっているけど、考えてみればバカみたいと、みんなが当然と思っていることをひっくり返して見られると思ったわけ。ところがいまのあなたみたいなテーマにすると、とたんに斜に見るおもしろさは全然なくなって、えらく硬くなって、社会はこうあらねばならぬというイメージを受けるけど。

岩崎(美)：私としてはオールタナティブ論という感じではなかったんです。しかし、今の社会の行きつく先に何があるのか。やはり生き方の価値観を変えることが必要ではないかと……………。

中村：会社社会に代わるものということで議論するつもりできました。僕は駿介さんが言うように、少し斜に構えていろいろ言った方がおもしろいかなと思います(笑)。

久しぶりの日本で感じたこと

## これはSFだ！

北 詰 秋 乃

これはSFだ。成田から横浜へ向かうバスの中で私はそう思った。高速道路、滑るように走る車、同じ形に丸く刈り込まれた街路樹の列、どこか未来の都市へきてしまったように思えた。新鮮な驚きと、少しの憧れと、故郷に帰ってきた喜びで、私は胸がいっぱいだった。東南アジア、ラオスから約1年ぶりの帰国である。

1日、2日、3日と時が過ぎた。私は1年半前まで毎日そうしていたように、東京へ向かう電車に乗る。4日、5日と経つうちに、不安でたまらなくなってきた。SFの未来都市でうごめくたくさんの人々は、さしずめ宇宙人か。秩序と便利さで覆われたこの町に、私の言葉を理解する人はいる

のだろうか。

ある日、私はバスに乗っていた。陽射しが暑かった。私の前の座席に座っている宇宙人から、私は「アツイ」という信号を受け取った(と思った)。日除けのカーテンは私の座席のすぐ横に止めてある。「カーテンをしめしましょうか」と言った私の地球語は宙に消え、宇宙人は「アツイ、アツイ」という信号をなおも発し続けながら他の席へ移って行った。もしかしたらその宇宙人は本当に地球語がわからなかったのかもしれない。が、もしそうでないとしたら、あまりにも言葉が少なすぎるではないか。私は寂しくなった。

こんなこともあった。私は駅に向かうバスを待っていた。近所のオジサンと一緒に待っていた。バスはなかなかこない。「よし、タクシーがきたらこのオジサンを誘って相乗りしよう」と思いつつ、さらに数分。タクシーがきた・・・と思うまもなくオジサンは電光石火の素早さで、タクシーをつかまえて、1人で行ってしまった。このオジサンも宇宙人だったのか。

岩崎：中村さんがサラワク・キャンペーン発足式で、「輸入すれば日本がゴミだらけになるからこれ以上熱帯木材の輸入はやめよう」と言われたけど、いろんな角度から日本がどうしようもなくなっていることを言って、こんなこともあったのかと気がつくのはおもしろいけど、「社会はこうあらねばならぬ、第三世界から学ぶとこうだ」とか言うのと、なんか教訓じみて、修身の話みたいで全然イメージがわかない。ご飯はたくさん食べてはならない。汗は流さなきゃならない。第三世界から学ぶんだからそういう感じかな、やっぱり。

中村：会社がなくても生きていけるような手だてはないだろうかと、そういうことじゃないでしょうか。

岩崎：なるほどね。

林：第三世界から学ぶということは切り詰めていくということではなく、もっと豊かな暮らしのあり方を知るといえるか、そこがうまく説明できないと、「JVCは何をやっているんですか」と聞かれたとき、おれたちがやっていることの説得性が……。



岩崎美佐子（いわさき みさこ）

86年から90年5月までタイ担当、6月からは新たに設けられた環境プロジェクトを担当する。

ともあれ、こんなにたくさんの方がいて、たくさんの方の言葉があるにもかかわらず、この国には基本的な会話が少なすぎる。“知らない人”に冷たすぎる。

以前は私もこんなことはなんでもなかった。しかし、1年のブランクを経て新たに見る日本は、あまりに都会的で新しく、あまりに目まぐるしい。“知らない人”がたくさんいてオッカナイ。

もしこの国が私の故郷ではなくて、もしここに地球語で共に言葉を交わせる両親や友だちがいなかったら、私はあまりの不安と孤独に耐えられなくなっていたかもしれない。

もうひとつ驚いたことがある。“ゴミ”が多いことである。宇宙人は、紙、ビニール袋、雑誌、なんでも捨てる。スーパーで買った野菜のパックも捨てる。ディズニーランドで焼きソバを食べたらその皿も捨てる。街はゴミでいっぱいにくらんだビニール袋だらけ。

ラオスでの1年間、買物をしたらビニール袋を、手紙をもらったら封筒を、だいじにとっておいた。

そしてたいせつに使った。そんな生活をしてきた私にとって、ゴミの山は大ショックだった。もったいなくてしかたがない。けちでもなんでもない。捨てるほどたくさんなかったら、なんでももったいないのが当然だ。一人で未来に迷い込んでしまった私は、日本のゴミの山を、口を開けて見ているだけである。

“過去”から吸い取ったものを未来へ持ってきてどんどん捨てていったら、どうなるのだろう。“過去”は吸い尽くされ、未来と共にすべて消えてしまうのではないだろうか。それこそSFである。

そう、これはSFだ。立ち並ぶ高層ビルの群れ、煙突から吐き出される煙、クールな人と人との関係、消費される金、カネ、物、モノ……。タイの、ラオスの、ひとつの警告的未来のようだ。しかし、これはあくまでSFだ。フィクションだ。こうあるべき未来ではないし、絶対こうなってしまう未来でもない。地球人は地球人なり、地球語で地球の未来を考えればいいのだと、私は思う。

中村：ちょっとやらないですか。なにを社会病理と  
考えているかということをざっと一巡しましょう。

岩崎：ああ、いいですね。

柴田：そりゃおもしろいですね。

中村：まず言い出しっぺから。

## ●心を忘れた社会

岩崎：じゃ僕から。よく言うことだけど、僕は身と  
心が切り離されているのが日本の病理の根本的な原  
因だと思っている。身とは僕らが物質的に生きている  
こと、物理的に生命を維持する肉体があるわけで、  
それが物質循環を基礎として広域的に成立している。  
もうひとつは心、僕は精神循環という言葉を使うわ  
けだけど、人はただ生きる機械ではなく、人との関  
係、喜びや悲しみという精神があり、それも人から  
人へと循環する。精神循環はたいていは親族・友人  
や地域に限定され、非常に狭い。社会病理の根本的  
な原因は、物質循環と精神循環の空間的なスケール  
の差異とそこから起こる問題、とりわけ物質循環が  
広すぎることによって、概して言えば心が身をコン  
トロールできない。栄養過多が起因する肥満、アト  
ピーも精神と肉体のアンバランスが肉体的、物理的  
な現象になって現れているということです。

精神の病理を明確に論じられないけど、一般的に  
は与えられたものに巻き込まれていくというか、参  
加の限界と言ってもいいのだけれど、状況をつき動  
かす主体的な動きよりも、状況の中に甘んじてしま  
う。そんなことから必然的にいろんな現象が起こっ  
ているのではないか。そこを乗り越える運動として  
JVCがある。第三世界の人々が困った状況に追い込  
まれているから、あるいは地球環境が危ないから日  
本としてなにかしなきゃならないのではなく、自分  
の社会病理を克服するものとして活動している。

中村：難しいことをいいましたね。

これをきっかけにやりましょうよ。物質的には豊  
かになったけれど心は貧しいという言い方が、財布  
からボランティアまでいろいろなところで言われて  
る。身と心の分離ですね。物質とか身体のこととはわ  
かりやすいけど、心のことがわからなくなっている  
のが今の特徴じゃないですか。心っていうのは心臓  
に由来しているんですけど、心臓移植まで行われる  
ようになったいま、心の所在がわからなくなってい

まった。心が欠けているとすると、心とはなにか。  
心とは人間の身体にあるのではなくて、人と人の間  
にあって、間が欠けているんじゃないか。この欠け  
ているということを攻めていくと、明治このかた繁  
栄し、戦後いよいよ拡大した会社にも身も心も捧げる  
ことに一番大きな原因があるんじゃないかと思ひあ  
たります。社会病理というとき、心の問題を見てい  
くとなにかわかるんじゃないか。

林：えらい難しい話になっちゃったな。僕が医者  
を志したのは、身体の問題をやりたいわけではなく、  
心の問題をやりたいからです。物質的な癌がど  
うこういうより、精神面が苦しい時代じゃないか  
と思っていた。寿命は薬づけにしても長ければ長い  
ほどよしとされ、時間が大切にされる。そのため、物  
質である薬をいかに投与するかとか、施設である病  
院をいかに作っていくかということに重点がおかれ  
てしまって、死をどう受け止めるかという心の問題  
はなおざりにされてきた。中村さんがさきほど心は  
人と人の間にあるといわれましたが、家族なりコミ  
ュニティーのなかで、みんなが死をどう受け止めて  
いくかということがおそそかになっている。

精神病と呼ばれる心の病気にしても、個人だけ  
でなく、個と個、個と社会の関係に問題がある。競争  
社会で、「もの」を多く持った方が勝ちという原理  
が心の問題になって現れてくる。病気は個人的なも  
のか社会的なものか。ユングなんかは個人を個人と  
して突き詰めてゆくと、結局は社会的存在であるこ  
とにいきつくと言っている。

結局、精神科医になって病気になった個人のみを  
治療する方法ではなく、NGOを通して人と社会の  
心の問題というか、いかに個と個とをつなぎ直せる  
か、そのところにかかわって僕自身としては満足  
しています。

柴田：いま叔父叔母が夫婦喧嘩をして叔母がうちへ  
逃げてきていて、ずっとかくまっている。叔母が逃



げまくって、家族が崩壊しようとしているのに、叔父は仕事を休めない。(笑) 会社ってこんなものかと思った。

僕は小さいときからエリート教育をされたのに、降りてしまった。そんな僕が降りなかった友人を見ると、後ろから槍をつきつけられているみたい。ちょっと落ちるとブスッと刺されるから、しかたなく上っているように見える。上っている奴らはみんなしんどそうな顔をして、「おまえがうらやましいよ」と言う。なにを病理というのかわからないが、おかしいと思う。

岩崎(美)：物質は快適な生活を保証するとして、私たちは快適さを求め、暑さ、寒さ、きつさなど肉体的に我慢しない生活をめざし、人との関係をめんどろなものとして切り捨てながら自分の生活を確立してきました。タイのスラムに泊まると、夜は遅くまで、朝は6時前からものすごくうるさい音がする。農村に泊まっても早くから鶏なんか鳴くからうるさい。でも誰も気にしない。日本だとピアノの音が聞こえると、殺人にまで発展してしまう。音を聞いて「みんな生きているんだなあ」というふうには感じられない。中村さんがおっしゃるように、心が人との間にあるんだったら、関係=心をどんどん切ってきた。それでいて、自分自身の老いとか死はすぐ見つめないと生きていけない。

この前「サラム・ボンベイ」というインドのストリート・チルドレンの映画を見たんだけど、とてもよかった。温室で本当につまらない生き方をしている日本人に比べて、インドの人たちは濃密に生きて簡単に死ぬ。ところが日本人は非常に軽く、造花のように生きて、死ぬときはじたばたする。

主婦は主婦、会社の人とは会社の人、子供は子供、老人は老人と分断され、同一集団を収容する老人ホームはいよいよ充実され、保育所も充実させられるのに、全体としてのコミュニティはない。医学の分野にしても、いよいよ細分化している。分類し分断して、なにをどう構築しようとしているのか。

中村：物質的に豊かということにおいて一番象徴的に現れているのは輸入血液だと思います。こんなに大量の血液を輸入して、日本の中にちゃんとした反



柴田久史(しばた ひさし)

JVC執行委員

81年JVCに参加。タイ、ソマリアで働いた後、85年にはソマリア担当。87年再びタイで広報を担当し、現在は早稲田大学学生。

対運動がほとんど出てこない。お米は一粒も輸入させないぞという理由は、お米は一生懸命働いて作るということで、血液は一生懸命働いても作れないということでしょうか。血液だけじゃない、髪の毛も輸入し、臓器などいろいろな形で買いに行く。それから赤ちゃんだって日本国内には代理の母がいなから外国で生んでもらう。

ところが人づきあいの方はどんどん希薄になっていく。僕は病院にいましたが、とくに癌患者の病棟ですと人間関係がどんどん希薄になっていく。なにがつらいかと言うと、看護婦とか医者とかが、患者を「もの」としてしか認めてないことです。関係がないんですね。死ぬということは人間関係がなくなることだと患者たちは思い知らされながら死んでいきます。マハトマ・ガンジーはとくに死んでいますが、彼の考えで自分は生かされていると感じている人がたくさんいて、ガンジーは生きていると言えます。逆に、癌病棟に長期に入っている人たちは、生きているけど人間関係がなくなっているということで死んでいるわけです。死をどう定義するか、新しい人間関係が作れない状態と定義するより仕方がない。

そろそろ65歳の人を3年延命するために5000万円使って病院に隔離する必要があるのか、ということを考えなくてははいけない。「5000万円は他のことに



林 達雄 (はやし たつお)

JVC事務局長, 医師

医師として, 83年, タイ・カンボジア国境, 85年, エチオピアでJVCの医療プログラムに参加。以降, エチオピア担当を経て現在に至る。

使ったら」と言えないほど, 物が豊かになったという現実があります。それを作り出したのは経済的な合理性を唯一の基準にしている会社社会でしょう。

岩崎: 僕も心は人と人の間にある, 人のつながりだと思いますよ。それがいまの会社に象徴される現実の社会の中で, 切れやすいつてことだなあ。

柴田君の話はどうなのかな, 奥さんがそうなるのも会社を休めない現象を作り出しているってことなんだけれど, なぜそうなるのか。会社なら会社という客観的な状況がそういう仕組みを強要するのか, 人が勝手にそうなるのか, あるいは人が潜在的に価値を選択することによって会社ができ, 逆にそれがしめつけてくるという循環した関係になっているようにも思うが。僕は会社組織はさることながら, 価値の選択にこだわってしまう。だからさっき我慢しなきゃいけないという話があったけど, どうして我慢できなくなってしまったか, そんなふうに議論した方がわかりやすいかもしれない。

## 久しぶりの日本で感じたこと

## 生活ってなに?

田尻 真由美

1年2カ月ぶりの日本。分刻みでホームに止まる電車に向かい, 黙々と同じ表情の人々が足早に歩いていく。子供たちはどこで遊んでいるのだろう。目の奥がきしんでしまうくらいぎゅうぎゅう詰めの視界。コンクリートだらけの地面。途切れない自動車の列と街のあかり。子供のころ, 未来を描いたアニメを見て, ちょっとだけ淋しく, ドキドキと気持ちがかきたてられたことを思い出す。

成田空港に着いて, 最初に目に入ったのは宅配便の受けけに並ぶ日本人の行列でした。海外旅行から帰ってきた人たちが, お土産などで重くなったトランクを, 自宅までの道のり四苦八苦して持ち歩かなくてもすむのです。エチオピアではとり

あえず持ち歩くか, 手伝ってくれる人を探すしかないで, あまりの便利さにまずは驚いてしまいました。

歩き疲ればタクシーがありました。急に雨が降り出せば, すぐ目につく場所で安い傘が売られています。夜中でもなにか必要になれば, ちょっと24時間営業のスーパーマーケットに行けば, たいがいのものが手に入ります。通勤電車を降りた人たちが, 読み終わった新聞を駅のゴミ箱に捨てていました。コインランドリーに自動販売機。どこに視線をやっても, 目につくおびただしい数の広告は, 便利な新製品の紹介と, いかにしてお金を儲けるかということばかりが印刷されているように見えました。

エチオピアにいたときと, 日本にいたときとは, お金の価値が違うように感じます。エチオピアで生活しているときには感じなかったのですが, 日本にいたといつもお財布の中にある程度のお金が入っていなければ, なんだか不安で落ち着かなくなってしまうのです。

雨が降れば軒下に入って雨を眺めながら雨があがるのを待つような, 買ってきたひとつの新聞をじっ



## ● ボランティアは多重生活者

中村：会社が病気を生むというのは、一元的な生き方しかしていない、単一の目標しか持たない、そうしないと競争に負けるからどうしても一重生活しかできないからだと思う。さっきのボランティア論に戻るけど、一重生活をしている人より、二重生活の方が二倍心が豊かになり、五重生活すれば五倍豊かになるとはいえないけれど、少なくとも、岩崎さんが学校教師だけしているよりは二重生活の方が人づき合いの数は増えている。その分だけ岩崎さんは得をしているというか、豊かになっているところがある。そこで僕は真似をして学校教師だけでなく二重生活をしなくちゃならない、二重だけでは納まらない(笑)、先は長くないんだからもっと人づき合いを増やしたいと、病院にいたときはなんでもいいから人づき合いを増やしたいと、これ以外僕の心を豊かにする道はないんだと思い詰めていたんです。出てみたらまたちょっと違ったけれど。

林：病院というところは医者や看護婦と患者の関係が一元的ということですが、本当にそうですね。治療関係以外の関係が十分あってもしかなるべきだと思うのに、全然ない。医者になるには6年間勉強するわけですが、人とどうつき合うかという社会的な勉強はゼロ、卒業してはじめて人と向き合う感じです。

最近おふくろが死に、JVCにも病気の母親を抱える人が多く、どう死を看取るか話題になることもある。寿命さえ延びればいいという単一の価値観が病院を支配しており、多少短くても家族団らんの中で死にたいと思ったら、けんかして出てこなくちゃならないところまできている。おかしいと思いつつ、みんな流されてしまうという点で、病院は矛盾の集積地点です。

岩崎(美)：二重生活とおっしゃるけれど、中村さんや岩崎さんは確かに二重生活をしているとしても、たとえばここにいる人たちはNGO界で一重生活し

くり読んで、他の人がまた読んで、ああだこうだと話し合うような……そんな時間も余裕も日本ではないでしょう。

日本での生活を振り返ると、そういえば、お金がなければなんにもできないと思える感覚が、生活の中に染み込んで暮らしていたような気がします。逆に言えば、無意識にでも、お金さえあればなんにもかもが可能になると思える暮らしをしていたような気がします。

綿花を育てて糸を紡いで、織った布を服に仕立てて着ること。羊に草を食べさせたり、水を飲ませたりして大きくなったら殺して食べる。薪拾いに遠くの林まで出かけて行き、拾ってきた薪を燃料にして料理をすること。そういうことを日本の人は生活の中で知らない。スーパーマーケットに行ってお金を払えば、食べるものも、着るものも手にはいる生活の中では、当然といえば当然かも知れません。いろんなことが便利になるにしたがって、食べたり、着たり、住んだりする生活の根っこが見えなくなっていくように思います。そこにつながる、いろんな周りのことも、感じられなくなっていくような気が

します。

干ばつと飢餓で有名なエチオピアでは、29年間、内戦が今も続いています。村の中で徴兵されていく男の人たちを追いかけながら、泣き叫んでいる女性たちに何度も出くわしていると、いいしれない怒りにさいなまれます。しかしあるとき、JVCのエチオピア人スタッフの一人に質問を受けました。「エチオピアはこんなに貧しい国だ。だから周りの国々が軍事援助をしなければ、29年間も金のかかる戦争なんか続けられるわけがない。反政府軍にはアラブ諸国が金を出している。どうしてアラブにはお金があるんだろう?」「石油があるから」「その石油は誰が買うんだろう?」……

一瞬心臓が凍ったようになりました。あてどなくドライブするのが大好きだった私の生活が、こんなところにもつながってようとは。

あのときほど、恐ろしくて、悲しくて、愕然としたことはありませんでした。生活していくことが、財布の中身を気にすることだけではないことを、日本に一時帰国して改めて肝に命じました。

ているわけですね。第三世界の人との出会い、外務省の人との出会い(笑)などもNGO 界内での出会いだし、そこが会社とどう違うのか。多重生活ではないという感じですが……。

中村：ボランティアは定義において二重生活になると思うんです。というのは、ボランティアがボランティアを専業としてそれだけで食っていったら、これはボランティアと言えるんでしょうか。

柴田・林：あははは。

岩崎：いろいろ議論はあると思うけど、この人たちは専業で、それ以外のなにものでも食っていないわけです。他に収入がない。この人たちは全部そうです。

中村：貨幣で所得があるということを話しているのではなく生活です。家庭の主婦は一銭も貨幣で所得がないけど、一重生活をしています。主婦が生活クラブ生協のようなところでボランティアをやると、これまた一銭も収入がないんですね。収入がなくても彼女たちは明らかに二重生活をしています。二重生活になって何がよかったかという、野菜をたくさん買って得をしたとかではなくて、違うつき合いが始まったことで心が充実したことです。主婦+生協運動+もうひとつなにかやり始める、たとえばJVCの手伝いをやり始めると、収入ではなんの変化がなくても三重生活になっていく。お金で考えない方がいいと思います。学校教師もお金のためだけにやっているのではないし……。

岩崎：ボランティアという言葉は解釈によって非常に違うから錯綜しやすい言葉です。ボランティアは何かといつも議論している。しかし、中村さんが主張してられるのは、基本的に多重生活をした方がいいということですよ。中村さんとしては誰でもある仕事を持っていて、それ以外に多重にしていけるにはボランティアという行為において加わっていくから、ボランティアはいいということでしょうか。

しかし、ボランティアをそう理解しないで、もっとも多重的な生活を当然のことと思っているとこれはボランティアでなくて、あたりまえの生き方になるわけですね。だから、なにかあってもうひとつやり、豊かになった部分をボランティアと呼ぶんじゃない。つまり多重的に生きることをボランティアと

呼ぶことは避けて、単に多重生活することは人とのつながりを重層的に豊かにし、したがって心を豊かにすると整理する方が分かりやすいと思うんですけど。

中村：半分はその通りなんです。半分というのは、僕はメインの分野があって、それ以外をボランティアとは考えてないんです。岩崎さんが言うように、どれもメインじゃない。しかし多重生活になっていく。それがボランティアだと思っているんです。ただボランティアという言葉避けたくない、使いたい。すべての人たちが多重生活を送れるようになったら、ボランティアという言葉は意味を失ってしまいます。しかし、残念ながらほんのわずかの人たちしか多重生活を送れない現実があり、その人たちはボランティアとして生きざるをえません。それが広がっていけばだんだんボランティアはいらなくなっていくと思うんですが。いまのところは、JVCの「V」はどうしても取ってほしくなくて(笑)。

岩崎：なるほど、それはわかりますね。

岩崎(美)：多重生活というのが、主婦をしながら生協ということもありますが、たとえば私の同級生なんかで、テレビのコマーシャルを作りながら映画を作りながら、本も書いている人がいます。彼の生活が豊かかといえば、ラオスの農民一筋の人の方が、豊かな自然との関係の中で豊かな生き方をしているということがあります。逆に言えば、都市に住んでいれば住んでいるほど、農村に住んでいるよりも多重生活をしやすい。ということは、会社人間のはてにしか多重生活はないとも考えられますが。

中村：僕は似たような職域の多重生活はよくないと思っています。学校教師が物書きである。これなんかちっとも多重ではない。いつも生徒の採点をしているやつが自分で答えを書いているようなものです。多重のそれぞれの分野は違う方が望ましい。映画も詩も音楽もなどと似た芸術の多重性だけではなく、果物を作るとか、牛を育てるとか、違った分野の多重性が必要でしょう。

## ● 身体の移動が心を豊かにする

柴田：僕はひとつ中村さんに伺いたいんだけど、難民を見ておれに似ているなって思ったの。日本に住んでいる難民は身体はこっちにあるけど、心はあっちにあるでしょう。本当はカンボジア人だけど日本に住んでいて、なんでも一生懸命やるようでやらない。僕も東京にいるようで岡崎の人みたいで、これをやっているようで、あれをやっているようで(笑)、いっぱいやっていますよ。しかし、百姓はひとつしかやっていない、「俺にはこれしかないよ」って言いきっちゃってね。がんばっていてあれもいいなあって。

中村：一生懸命がんばらなくていいんですよ。一生懸命がんばるのはそろそろやめにして、どっちつかずの生き方から新しい人間づきあいを見つけましょう(笑)。カンボジアの人でも難民の方が定着している人よりも相当有利になっていると思います。僕はプランテーションの労働者の故郷の村をいろいろ歩いてみました。そこで運動をやっている人を見るとね、その村に何十年と暮らしている人じゃなくて、マレーシアのゴム園労働者だったのが、インドに帰ってきて運動はじめちゃったとかで、ある時期ふらふらした人がみんなを組織したり、新しい生き方の目標を作り出したりしている。触媒の役割をしているわけです。ところが飛行機に乗ったこともない、海を見たこともない人ばかりのところでは、なかなか運動が深まらないということを目撃しています。ふらふらと出歩く(笑)、そこですごくいいことを見てきているんじゃないかな。難民の人たちは今はなに

もしていないかもしれないけど、どっかで5年後になにか始めるかもしれない。

林：日本でも都市に出てUターンした人の中から新しい活動が始まるって聞いたけど、確かにそんなところがあるのかもしれないよね。

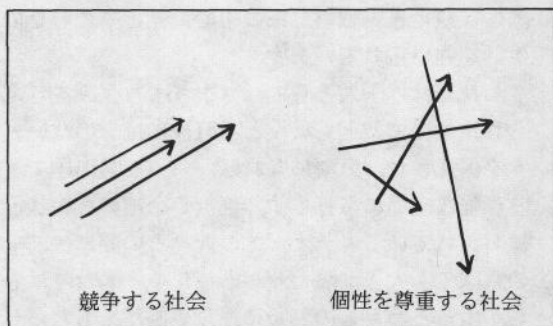
中村：日本の村おこしの中心的な人物って、かなりふらふらしているんですね。それでいよいよとなってやっている。たとえば白保の空港反対運動の中心になっている山里節子さんは、日本のスチュワーデス第一号で、アメリカと日本の間を往復していた。それがいまは飛行場建設反対運動の先頭に立っていると(笑)。白保に土地つきの人として生きてきた人よりも、もっと切実な行動を駆り立てるものがあるんじゃないかと思うんですよ。

柴田：じゃあ、多面的な生活をするといろんな人と出会ったりいろんな刺激があるからいい。人生を展望できて選択の可能性がいっぱいあるということですかね。

中村：そこで、たとえば人間の航空運賃はできるだけ安くして、貨物の航空運賃はできるだけ高くしたらどうでしょう。最近ではインドネシアのマグロを冷凍しないで空送したり、アメリカの牛を生きたまま空送しますからね。岩崎さんのいう物は動かさず、人は動く。これは社会病理を少し少なくして、第三世界とのつき合いを深める。もちろん第三世界の人でも日本に来やすくなる。たいそうな社会変革ではなく、運賃ひとつで進展があればおもしろいんじゃないですか。

## ● 第三世界に何を学ぶのか

岩崎：精神循環を大きくするという意味で人の動きを促進するというか、物を動かさない方がいいと思うんですよ。だけでもうひとつ話が中途にひっかかっているような感じを受けるのは、競争と個という関係で、僕はこんな図(右図参照)を書くんだけど、競争するというのはゴールをひとつにしないと競争にならない。みんなが別の方向に同時に走りだしたら、すれ違っただけで、どっちが勝ったかわからない。つまり、すべての向きを同じにするから競争





が生まれるわけで、多面的な目標があれば競争は成立しない。競争が成立しない社会がばらばらかというと、自分の個性、内的条件にしたがってある道を選択し、相互に補完するシステムを作ることができるわけです。ところがいまシステムが拡大しちゃったから、ある地域をとってみるとみんなが同じ方向に走らざるをえない。したがって競争によって、人間の関係が切れるということは、システムと個人の行動の関係の中でよくわかります。しかし、拡大し過ぎたシステムが地球環境にぶつかってはね返ってこない限り、競争を制御する力は生じないんじゃないかと思っている。

いまの社会病理と第三世界という関係の中では、精神循環を拡大するのはひとつの手段だと思うんだけど、わかっているけど現実には成立しにくい。しかし、そういう方向への努力は否定できないし、僕らもやっているんだけど、もう少しはっきりさせたいのは、その中間過程において、こうやっていいというイメージはありえるか。さきほど司会者が言

っていたのは、おそらく都市と農村、先進国と途上国の対比においてのその多重性なり多元性が、都市の延長上にあるのか、本当は農村の方にあるのかということだけど、あなたがしきりに第三世界に学ぶというのは、何を学ぼうとしているのか、もうひとつイメージがはっきりしないが。

岩崎(美)：システムティックには学べない。さっき中村さんは航空運賃を安くしてみんなが行ったらいとおっしゃったけど、5～6年前中村さんとこの話をしたことがありました。いま日本人は世界中に30～40万人出ているけれど、そこで日本人社会を形成して、現地の人たちとは違うんだという生活を築いている。旅行しても、たとえ本当にそこに住む人たちに会いたい気持ちで行ったとしても、物理的にはほとんど農村などは訪ねられず、観光地を回り、あたりまえの人との出会いがないまま帰って来る。すると、インドに行ってアグラを見たかも知れないけれど、インド人の生活は見られない。インド人はたかってうるさかったとか、危うく騙されそうにな

## 久しぶりの日本で感じたこと

### 東京雑感

山田 盛

わたしはいま、最貧国という不名誉なレッテルを貼られ、弾圧と強制によって、かろうじて崩壊を免れている国、エチオピアで暮らしています。雨不足による凶作は常態化し、アラブ諸国とイスラエルの介入により、激化の一途をたどる内戦。国民は飢えと内戦の恐怖の中で、死と隣合わせの生活を強いられています。

わたしは外国人として、さまざまな保護を与えられ、栄養失調とも兵役とも直接には縁のない日々を保証され、いやになれば、いつでも出国できる身軽な立場にあります。選択の余地のない状況におかれているエチオピアの人々との間には、その意味で、大きな隔たりがあります。隔たりはむしろするとわたしの判断に誤りや偏りをもたらし

ているかもしれません。それを承知のうえで、あえて、彼の地で見聞きし、学ばせてもらったことを手がかりに、わたしが日本でいつも感じ、いまだに払拭できないでいる不安と居心地の悪さの原因を考えてみたいと思います。

1年8カ月ぶりの日本、いや正確に言えば東京です。完全な浦島太郎を自覚するほどではありませんが、留守中の変化にはやはり戸惑いを覚えます。そしていつものように、得体の知れない恐怖感がやっぱり襲ってきました。それは、少し大げさに言えば、飲めない酒をむりやり飲まされたあとに感じる吐き気と軽い呼吸困難をとまっています。嫌いな食べ物や口いっぱい詰り込め、飲み込めないでいるときの感じにも似ています。しばし人波を離れ、目を閉じ、耳を塞いでじっとしているのが、最も効果のある対症療法です。気分がよくなってところで、状況を思い起こしてみると、次のようなことが浮かびます。

1. たくさんの人が異様に大きく聞こえる声でわめ

ったとか、汚なかったという印象しか持って帰ってこれないわけです。差異を認めて帰ってくる。差異は気にしないというか、差異は差異として共に生きるという生活がどこにでも転がっていたのに、だんだん差異を抽出して、「あの人とは違う」と選別して、同じ者だけがかたまろうとしている。

第三世界の場合も、国家レベルでは植民地分断統治の名残として、差異の強調が民族闘争なんかになって、いたる場所に傷跡として残り、傷口はいまも拡大しつつあるわけですが、村人レベルでは、共に補い合いつつ生きている。そこを学び、そう生きたいと思うのですが。

中村：それは現場にある会社が癌だと、僕は会社の方にもって行くわけですが、海外進出している人たちは、会社生活として海外に行き、海外旅行の客たちも、会社のルートに乗って旅行する。会社がなくて人々が国境を越えて動くようになれば、ずいぶん違った生き方があるのになあとと思います。外国旅行も外国生活も会社を軸にする。会社ってなんだろう

と思うんです。

学生から聞いたんですが、日本の会社はスポーツをしていると就職しやすい。会社の仕組みと運動部の訓練の仕組みが似ているんですね。それはなにかと考えて、軍隊だと思い当たりました。明治に作った軍隊の序列は会社の序列と同じじゃないかなって。この前の戦争のとき、数百万の日本人がアジアに出かけたのに、その人たちと交流を持たないで帰ってきた。それと同じで、会社人として我々が出かけて行くときは、どうしても一元的なというか一重生活となり、会社以外の生き方をしない。

岩崎：おっしゃる通りだけど、会社の原因にしちゃうのはちょっと酷だとか、会社という組織はもともと臆病な、よっかかって生きていたい人がよっかかって作った結果の組織ではないか。個性的に自分で生きようとしていたけど、会社に入ったら人間をダメにされて画一的になったんじゃないかと、もともと自分で強く切り開いていくのを恐れる人間がよってたかって会社を作って、同歩調で社会をじゅ

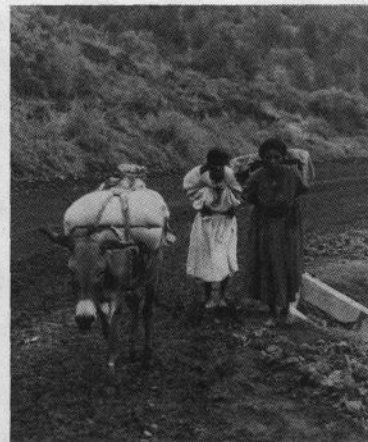
- き合っている。しかも、すべての会話が当然のことながら日本語で行われていて、内容がよくわかるため、声はひとしきり、耳だけではなく脳を刺激する。
2. 広告用のポスターや看板が氾濫し、それらは、ずうずうしいほどに風景を占領し、さまざまなメッセージを執拗に送り続けている。
  3. 人工的な遮閉物が多く、遠くを見通すことが出来ない。
  4. ほとんどの物に臭いが無い。

つまり、過剰な情報が視覚と聴覚を通して一度に押し寄せ、脳が対応しきれないでいるのです。無意識のうちに情報を選択し、不必要なものを無視するということができず、無抵抗のまま一方的に刺激を与え続けられ、そのすべてに反応させられているのです。無意味なメッセージに翻弄されたあと、疲労感だけが重たく残ります。その一方、きゅう覚はほとんど刺激を受けることがありません。臭いのない無機物のなんと多いことでしょう。臭いを消されているため、町全体に生命感がないと言えば、極端に聞こえるでしょうか。町全体が、ちょうど大きなテ

レビの画面に閉じ込められてしまったかのようです。音と映像だけの世界。

あと3週間もすれば、再びこの町を離れエチオピアに戻ります。エチオピアの人々の生活は貧しく、苦難に満ちています。しかし、彼らは生きています。自然と共存しながら。

帰りになんいざ、生命の国へ。



うりんしているのではないか。問題は一人ひとりが生きることを恐れることにあり、恐れずに飛び出そ

うとすると、親が押え込んでしまうという、そのあたりにあると思うんだけど。

## ●都市を問う

中村：僕は都市への集中はアジアでも日本でもとどめようがないと……。

岩崎：とどめようがないですか。

中村：ええ。だから都市生活をやめろということはほとんど不可能だと思っています。また、言わない方がいい。都市と農村の両方に住む生き方がいいのではないか。半年は農村に住んで、半年は都市に住むとか。マニラやバンコクに住むことは否定できないけど、半年は農村に住みなさいと。

岩崎(美)：そういうのって出稼ぎってことですね。

岩崎：いま、世界の都市人口は42.6%、2000年には46.6%、2025年には60%になって半分以上が都市に住むといわれている。いまの形で情報と時間を分けて住むことは不可能なのだから、将来的には都市システムそのものが崩れるのではないか。都市が分散して農村のなかに埋没し、物質循環は小さい単位で確立して、横のコミュニケーションがあるというイメージ……。

林：都市がどうして崩れるんですか？

岩崎：都市システムは基本的に一点集中をめざしな

がら序列を作る。それは中心部において精神循環と物質循環を離れさせ、その結果周辺部において地球環境を食う化物だ。

岩崎(美)：ただどうやって都市は分散するんですかって？

岩崎：分散する方向はわからない。

岩崎(美)：全然分散してないじゃないですか。

林：自動的にそうなりますか？

岩崎：自動的ににはならないでしょう。

柴田：逃げるしかないんじゃないか(笑)。

岩崎：食糧の調達とか、都市システムそのものが食えなくなるという理由でしか起こらないでしょうね。

林：でも都市にどんどん集まっているというか、都市が独占しているでしょう。

岩崎：いつまでもそうはいかないでしょう。

岩崎(美)：東京の首都圏なんか巨大だけど、交通渋滞もそこそこで機能しているじゃないですか。他の国だって……。

岩崎：都市というのは、特定の都市のことではなく、システムですよ。

## ●会社社会が作る日本の病理

柴田：日本の社会病理っていうけど、先進国の中で会社社会というのは日本独自に現れている現象なの。

中村：日本に特に強いと思います。日本の会社とアメリカの会社は全然違います。アメリカの人は会社は労働力を切り売りする場所だと思っている。日本の人は会社に報告しないでも残業するし、日曜でも会社のことを考えている。会社に求められたら相当の犠牲をはらうし。アメリカの人は犠牲を求められたらやめてしまいます。

柴田：そしたらアメリカの人は病んでないということですか。

岩崎(美)：それは社会の「かた」の違いでしょう。中根千枝が「たて社会」と言っている、会社家族とというか、いったん入るまでは非常に冷たく、外と

内をわけるけど入ったら仲間ですという日本と、「よこ」に教授は教授どうし、学生は学生どうし仲間意識を感じるアメリカと。「かた」の違いはあっても目指しているもの、経済原理は変わらないでしょう。岩崎：社会病理という意味では、ゴルフ場問題、あるいはリゾート法って言ってもいいけど、これは近年まれにみる大きな問題であり、典型的な社会現象だ。要するに、人の家を荒らしていたお金の亡霊がいよいよ自分の足を食いだした。第三世界の資源収奪だけしてる分には、ずるい人がごつく生きているというイメージだけど、自分の足まで食いだしたら狂人です。東京という機構を支えるために周辺を食う。しかもゴルフをやる層ではなく、会員券を金券として。これほどゴルフ場の環境汚染が言われてい





人々は都会に集まる（バンコク）

るにもかかわらず、投資する人、土地を売ってしまう人がある。聞くところによると老人と若い人との対立があり、老人が売りたいがるそうだ。

柴田：自分のことだけを考えている会社人間と違って、植林など次世代のことを考えて生きてきたじいちゃんたちはどうしたのか。空間を越えた関係だけでなく、時間を越えた関係も知覚に入れないと駄目だって、よく岩崎さんが話してるけど。

岩崎：じいさんが売るのは、子供のことを考えているからだと思う。しかし、子供は子供で生きていくのだと突き放した方がいい。これは、親が子供に会

## ●ふたたび人の移動の効果について

中村：ひとつだけ言いたいんだけど、さっき美佐子さんが出稼ぎって言いましたけど、僕は出稼ぎには基本的には反対です。なぜ反対かという、お金で人間の労働力を売るということはあまりよくない。しかし、過渡期として出稼ぎに賛成しているんです。どうしてかというですね、青森県で生まれ育って外へ出るチャンスがなかった人が東京の建設現場で働くと、新宿で一杯飲むようなことが起こる。もちろん会社社会の中で出稼ぎしているんだけど、違う世界を見ちゃうんですね。タイやフィリピンからの出稼ぎの人も、日本に過酷な運命が待っていて、悲劇的な事件がたくさんあるから決して奨励したくないし、遠い将来はタイの人が日本へ来るなら労働者としてではなく、ボランティアとして来て欲しい。しかし、タイから一歩も出たことのない人が日本にすれば、悲しい運命にあうと同時に違う世界を見ちゃう。死なないで帰れたその体験が生きてくるんじゃないか。だから出稼ぎに全面的には反対できないし、過渡期にはやむをえない。いま日本人が50万人出て行っているとしたら、50万人の出稼ぎは受け入れたらいい。いやだったら、日本人が出て行くのを少なくすればいい。

岩崎：なるほど。

柴田：自分の社会と違う世界を見ることって、あらゆる面で有効なことなんですか？

中村：新宿の飲み屋でママさんとのつき合いが始まって、もう村へ帰るのがいやだと思って、ついその

まま都会に残っちゃう人があるかもしれない。

岩崎(美)：そう。山谷とか寿町、とくに山谷はそういう人たちでできてるんですけど、よい結果なのか、悪い結果なのか(笑)。

柴田：おれみたいに田舎からきてる人間は、都会にはおもしろいことがいっぱいあるから出てきたんだと思う。都会ってそうやってできてんじゃないの。

中村：そうですよ。そこで固定して一元的な生活をしてしまったらだめだけど(笑)、もう1回ふらっと帰ったら、すごい力になるんじゃないか。

林：なるほどね。

柴田：なかなか動かないじゃないですか現実。みんなふらふらふらふら東京に入ってきて、岩崎さんは都市がぶつつぶれるまで人は入ってくると言ってるし。

岩崎(美)：岩崎さんは、人の動きは農村から都市へという方向はあり得るけど、反対の方向はありえないと言っているでしょう。ゴミは反対の方向だけ。たくさんの人が帰ればいろんな動きも少しは出るだろうけど、なかなかないわけでしょう。

林：日本の中ではUターンはけっこうあるじゃない。

柴田：ないですよ。

岩崎：ないないないないない。

林：そうですね。

岩崎(美)：地方都市ならまだあるけど、農村は皆無に近いんじゃないかな。

林：そうか。

岩崎：部分の問題ではなく世界的な趨勢として、都市へ出てくる。いま第三世界の農村人口は27億、全体人口の半分以上いるわけだけど、その人たちが刻一刻と都市に押し寄せてきているわけです。そのうち、中国人が8億人。新聞で見たけど、盲流といって2億人の季節労働者が一定期間都会へ出てくるといふんだからな。農村にいる人たちの潜在的な都市へのプレッシャーはすごいですよ。その人たちがみんな都市に集中すれば、地球の負荷は増大する。エネルギー消費量からして違うんだから。そういう関係の中で、5000年前から発生している都市が根底

からゆすぶられているという意味で言っているのであって、すぐ帰るはずはない。

中村：だんだん都市と農村の違いがなくなってくるということじゃないんですか。都市の人が本当の都心に住めなくなると同時に、外の人がじわじわ中に近づいてくることが世界的な規模で起こり、人がうろうろうろろしはじめる。僕は人がうろうろするのは、そんなに環境に負担をかけないと思っているんです。物がうろうろするよりも。

林：うろうろってとてもいい言葉だと思うんですけど、あんまり特定の価値観で動くより。

## ● JVCは会社になれない

林：中村さんがよくおっしゃる会社っていうのは、なにが会社なんですか。逆に会社じゃないというのはなんですか。そのへんの小さい商店とか、生活クラブ生協も会社なんですか？

中村：日本の会社の明瞭な定義はあるんですよ。年功序列、終身雇用、企業組合があるってことです。だから、東京大学も大蔵省も会社、22歳で入ったらずっとそこにいるでしょう。JVCは会社じゃないんです。

久しぶりの日本で感じたこと

## 第三世界の理解のために

内山田 康

今回の編集テーマは、「日本の社会病理と第三世界」だが、この二つの領域が僕の中でうまく結びつかない。日本の社会は病んでいる。一方、第三世界は健全だ、という風に黒と白とに分けてしまうのには無理がある。第三世界は極めて多様な国々からなり、一つにくくってしまうことは出来ないし、一国の内部においても都市と農村の間には越え難い社会的距離がある。さらに、日本の社会が病んでいるのと同じくらい、第三世界の諸社会も別の仕方では病んでいる。そして、第三世界の中に豊かさがあるように、日本の社会の中には、例えばヨーロッパには無い豊かさ(そして貧しさ)がある。というわけで、ここでは日本の病んだ部分と第三世界の豊かな部分を取り出して比べるのではなく、第三世界を理解する上で妨げとなっている日本の側の問題についておしゃべりしたい。

僕がイギリスに来て3年が過ぎた。この社会も病んでいる。イギリス病から立ち直るためにこの国は日本から資本と日本の管理術を導入し、サッチャーなどは日本企業の貢献を絶賛して日産の会長にサーの称号を与えたくらいだ。ロンドンのシティーから世界を見ると、日本経済(シティーは社会には関心を持たない)は健全だ。ワシントンの世銀から見るとアフリカの経済(世銀は銀行だから社会に関心を持たない)は病んでいると診断を下す。原因はマネージメントにあるとして、倒産した会社に銀行が介入するのと同じ方法で、第三世界におけるマネージメントの中心である首都(農村の問題であっても農村には入らない)に、しかも国家機構の中に入ってくる。二つの問題点を明確にしたい。第一は、どうやら経済が社会と取り違えられているらしいということ。第二は、国家と社会の区別があいまいになっていることだ。こういった混乱のために、日本の社会病理と第三世界と言われてもなかなかピンと来ないのかもしれない。

先日、出版業界の人たちと話をしていた、何をしているのかと聞かれたから、博士課程で第三世界の農村の問題を研究していると言ったら、そういうが

どんどんやめる人がいて成り立っているような……

全員：あはははは。

中村：途中から入ってくるような人がいるところは会社じゃないんです。医者も医師会があるし、村役場も自治労があるし、JVCに労働組合が出来たら会社になります（笑）。

林：なるほど。

柴田：だいたい団結できないやつばっかりいるから、そんな難しいのできないよ（笑）。

中村：アメリカの会社はこの3つがないんです。終身雇用もないし、年功序列もないし、企業組合もない。組合は旋盤工なら旋盤工だけの組合です。だから、GMとかフォードの中には組合が数えきれないくらいあるんです。日本の会社は1つには1つの組合ですが。

林：企業単位で完結する感じですね。

柴田：僕はよくわからないんだけど、日本の会社も

悪いけどアメリカの会社もばかなことをしている。システムが違ったとしても……。

中村：アメリカの会社と日本の会社が競争したら必ず日本の会社が勝ちます。いまのシステムが続く限り、金儲けのための競争という意味では、日本の会社が世界中で一番すぐれた組織なんですね。これ以上、人間の活動力を全面的に組織できる方法はないんです。アメリカの場合、そこまで結集力がないから競争で負けます。

柴田：じゃあ日本が一番悪いんだ。

中村：日本に勝てるとしたら韓国かもしれない。でも韓国も日本の会社ほど結集力をもちえません。JVCもなるべく年功序列にならないようにして欲しいし、終身雇用にならないようにして欲しいし、企業組合ができないようにして欲しい。

柴田：そりゃだいたいしょうぶですよ。すぐ辞めてっちゃうから。終身雇用なんてとてもとても（笑）。

クシャをたくさん知ってると言う。大企業にスポンサーになってもらい、向こうの人を連れて来て、イベントをやり、クイズ番組などにしたり、問題ハッゲンしたりするのが受けるそうだ。僕がちょっと経済人類学の方法……と言いかけると、ああクリモトかという反応だった。クリモトは先日、テレビのコマーシャルで見た。こういう浮かれたタレントのものは読まない方がいい。自分でその場に立って第三世界という現象を経験した方がいい。しかし行っただけでは第三世界を作っている社会関係は見えない。社会の問題はモノとモノの関係を見ては判らないが、人と人との関係を見ると一気に判って来る。人と人との関係は見たら触れたり出来ないから、頭の中に再構築されなければならない。だから、社会関係を再構築する想像力がなければ、たとえ現場に立ったとしても、日本のモノとあちらのモノを比べるだけで終わってしまう。

ヨーロッパがひとつになるとニュースで言う。しかし、実は統合によって、分裂や対立が深まってく。東西対立の象徴としてのベルリンの壁が取り除かれた。しかし混り合うことによってヨーロッパにおける人種差別は一気に活発化し始めている。

人と人が、モノと同じように交流を持たず、物理的に時空を共有しているところに原因があるのではないか。社会関係を理解するための想像力が欠如しているからネオナチズムが台頭しやすくなっているのではないか。

僕はある人に、忙しいというのは心が亡くなる状態だと言われ、なるほどと思った。東京もロンドンもバンコクも騒々しく、人々は忙しい。静寂が無いから、そして行動する自分と考える自分の間に距離を置くことが出来ないから、自分自身がやっていることを対象化して反省することが難しくなる。日本では今年秋から、開発に関する人材トレーニングを行うところがいくつかオープンしたが、その内容は、経済偏重でマネジメント偏重だった。開発援助の名においてどれだけ第三世界の問題が発生したかということを思い起こすと、日本の開発学が第一歩を踏み出したこの秋に間違ったのは、開発という行為を対象化する視点を欠いている点だ。何が問題か判らないまま、何をなすべきかが教えられる。





### 第三世界理解講座

「地球人として生きるって何だ！」

始まる

9月21日(金)～11月9日(金) 午後6時30分～9時まで、連続講座が早稲田奉仕園セミナーハウスで始まった。JVCが連続講座を企画したのは今回が初めて。参加する人がいるだろうかという心配も杞憂に終り、定員以上の希望者に断りの返事をするのが心苦しい限りの盛況ぶりとなった。講座はちょうど半分終了したが、受講者の数は減るどころか、毎回、教室いっぱいである。

毎回講座が終了した後も、近くの喫茶店あるいは飲み屋で、議論が尽きない。

参加者の声をアンケートという形で取りあげ、『日進月報』という機関紙まで発行することになった。

一部を紹介しよう。

「この講演にすれば何か自分ができることを教えてくれるだろうという甘えがありました。自分の価値というものをもう一度見直しなが、まったく別のものも、無色のレンズで見られるようになりたいと思っています」

「ODAや企業がらみの植林、村人たちの自主的行動による植林、TVや新聞で報道される一面だけを見ずに、その奥にある事実を見極める事が大切で



| 日付    | タイトル                 | 講師             |
|-------|----------------------|----------------|
| 9/21  | 第三世界とNGOの果たす役割       | 岩崎 駿介          |
| 9/28  | 植林することは、いいことか        | 岩崎美佐子          |
| 10/5  | インドシナ10年 ～タイからベトナムへ～ | 熊岡 路矢<br>鈴木 由子 |
| 10/12 | 緊急度を増すエチオピアの現状       | 林 達雄           |
| 10/19 | 農から語る世界 ～風の学校から～     | 中田 正一          |
| 10/26 | 自分の生き方の実践とJVCの活動     | 星野 昌子          |
| 11/2  | 熱帯雨林とODA             | 黒田 洋一          |
| 11/9  | 私たちに何ができるか ～行動提案～    | 柴田 久史<br>山口 誠史 |

あると思います」

一步踏み出すための第三世界理解講座、受講者も毎回話を聞きながら、自分で何ができるか、何がしたいか考えている状況である。最終日には、行動提案として私たちに何ができるかを具体的に話しあう。

どんな提案がでるか、実行に移せるか、わくわくする講座である。

(柴田くす子)

## book

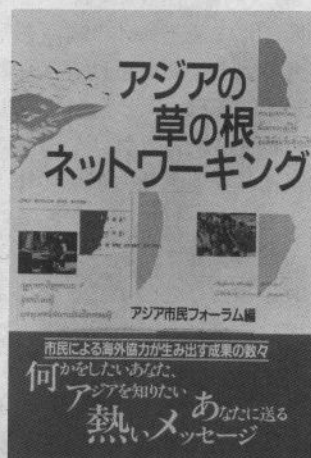
—— アジア市民フォーラムの記録

### アジアの草の根ネットワークキング

いろいろな人たちがさまざまな方法でアジアの人々と助けあい、協力の輪を広げている。その人たちが1988年3月、小田原市に集合し、お互いの抱えている問題、日ごろ考えていることを話しあった。JVCも実行委員長の星野昌子をはじめ、当時JVC神奈川代表をしていた山口誠史が中心となり、開催に全面的に協力した。

どうしたらほんとうにアジアの人々と結びつくことができるか。これからアジアにかかわろうという人はぜひ手にとってみて下さい。

(学陽書房 2000円)



## コンサート事務局を担当するトラック野郎

### 岩間邦夫さん

「じゃ、メシにしましょう」  
ン？その声、あっやっぱり岩間サ  
ン！（待ってたヨ、その一言）

2年目の“JVCベネフィット  
コンサート”事務局を担当して大  
忙しの岩間邦夫さん。大学時代か  
らトラックの助手をやっていたと  
いう自称「運送屋」さん。なるほど

頼りになりそうなドーンとしたか  
らだです。でも根はやさしくて、  
恥ずかしがりや？「学生のころか  
ら南北問題、難民問題に関心があ  
って、NGOの報告会、講演会に  
はちょくちょく足を運んでいたん  
です。でも、なんか知らないところ  
には入っていけなくて……」



が、昨年の6月ラオスのプロジ  
ェクトの支援グループに加わると  
ズルズル。週1〜2回のボランティア  
が運転手の適職(?)もやめてJVCに  
全身ドブプリ。「ここでいろいろ勉  
強して、早く現場に行きたいです」

## 黒子に徹したい……

### カンボジア母子保健スタッフ 竹井潤子さん



「私は12歳までブラジルで育ちま  
した。まわりは働いても働いても  
絶対にぬけ出せない貧しさ。ウチ  
も同じ。食べるものに困ったこと  
もありました。でも母が倒れた時、  
周囲の人々が物心両面で支えてく  
れました。友人は1カ月通学でき  
なかった私に、放課後勉強を教え  
てくれたり、ノートを貸してくれ  
ました。そのころから私は“第三

世界で働く”と決めていました」  
ポルトガル語と英語をみがき、  
通訳をめざそうと思ったこともあ  
った。が、働きながら学べ、どん  
なに社会が変わろうと需要のある  
職業をと考えた結果、看護婦の道  
を選んだ。「そのころから青年海  
外協力隊というのが莫然と頭にあ  
ったんですけれど……」が、新聞  
を見ると、ODAや協力隊の批判  
がたびたびのっている。

「今年3月、ユニセフ主催のシ  
ンポジウムで＜人間中心の開発＞  
というのを聞いて『これだ！』っ

て思ったんです。援助する、導くん  
じゃない、自立向上への黒子に徹す  
るという支援」もうじっとしてい  
られなくてJVCの門をたたいた。

11月からはカンボジアで母子  
保健プロジェクトのスタッフとし  
て現地指導員とともに働く。「幼  
い時の思いを忘れずに。早く友だ  
ちが欲しいなあ。それから自分が  
楽しめる事を見つけない。へこた  
れそうになった時のカンフル剤に  
ね」

貧しさを知っている強さが感じ  
られる竹井さんでした。（荻野）

## JVCの絵はがきができました

## 「アジアから」

「JVCも絵はがきを作ってほしい」というみなさん  
のご要望がかねてからありましたが、このたび菅洋志さん  
の写真を使わせていただき、とてもすてきな絵はがきが  
できました。お友だちへのプレゼントやグリーティング  
カードにぜひお使い下さい。

なお、売り上げはカレンダーと同様、アジアやアフリ  
カの人々の生活改善のために使わせていただきます。数  
に限りがありますので、お早めにお申し込み下さい。

あて先 JVCカレンダー事務局  
8枚組 600円（送料 1セット120円、2セット175円）



アフガニスタン



### キャンプの周辺から木々がなくなる

難民は、生まれ故郷を追われ、着の身着のまま生活の諸条件を奪われて逃げなければならないという意味で本人にとって悲劇であるが、一方、難民が出て行った先の社会環境、自然環境にも大きな影響を及ぼす。

私がソマリアの難民キャンプで見た光景は、乾燥した大地に見渡す限り並ぶ粗末な小屋の群れで、実に殺風景なものであった。JVCのプロジェクトがあるエチオピア国境に近いルーク地区は、もともと年間降水量200ミリ程度で、1メートルくらいの高さのとげのある灌木がまばらに生えるだけの半砂漠地帯である。人々は山羊や羊を放牧し、年2回の雨期には雨の降った直後に川辺にメイズを蒔いて（運が良ければ）収穫する粗放的な農法で暮らしていた。過酷な自然条件ではあっても、人々は半農半牧で何百年も暮らしてきた。

そこに突然大量の難民が流れ込んで来たのである。ソマリア全土で70万人、ルーク地区だけで10万人を超える人々がなべ釜ひとつで逃げて来た。ソマリアの難民キャンプは、タイやホンコンでみられる鉄条網で囲まれたクローズドキャンプと違って、無秩序に見渡す限り粗末な小屋が並ぶオープンキャンプである。人々は自由にどこへでも行き来している。そのかわり、住む家から燃料の薪まで自分たちで手に入れなければならない。そのために難民キャンプの周囲から同心円を描くように木のない砂漠が広がっていく。最初の難民が来てから既に10年以上たっているため、今では片道10時間くらい歩かないと日々の煮炊きのための薪を入手することはできない。

### 環境破壊が見える世界と見えない世界と

日本にいればお湯を沸かすことなど造作もないことである。料金さえきっちり払っていれば、水道の蛇口の栓をひねってやかんに水を受け、ガスレンジ

にのせてスイッチを入れればいい。こんな簡単なことが、ソマリアはもちろんのこと、多くの第三世界の国では一仕事となる。まず水を汲みにいくのは、特に女性にとって重労働の日課である。そして火を炊くための薪を手に入れるのも1日がかりの仕事になる。現在でも地球上に生きる人類にとって日常の燃料の第1位は薪（炭も含む）であり、ガスや電気による便利な生活を送れるのは少数であることを知る人は、日本では少ないのではないであろうか。

ソマリアの難民キャンプで仕事をしながら（生活環境への植林指導を細々としていたのであるが）、薪や建設資材のためにキャンプの周囲の木が次々と切られて大地が裸になっていくのを見ていて、なんとすさまじい環境破壊かと思っていた。しかし翻って日本の生活を考えると、私たちは、木材の伐採や石油、天然ガスを汲み上げている場面を直接に見ることはできないのだが、ソマリアのキャンプで難民が使うエネルギーや建設資材の何十倍、何百倍も浪費している。フィリピンでマレーシアで切られた木が私たちの便利な生活を支えている。それがここでは生活と環境の破壊がまさに直結して見えるだけなのである。そんな私たちに、木を切れば砂漠化が進むんだと難民に説教することなどできるはずがない。私が農場や難民キャンプへ苗木を配って木を植えることを勧めたのも、そんな後ろめたさの裏返しだったのかも知れない。

いつだってそうなのだが、割を食うのは底辺、または周辺の人々である。先進国の清潔で整然とした都市の生活では見えてこない矛盾が、人と自然がまさに向かいあっている南の人々の暮らしの中に、あらわになって吹き出している。私たちは、目の前から隠されているそんな矛盾に目を向け、被害を被っている人々と手を取り合わなければならないのではないだろうか。

（山口誠史）



# JVCプロジェクト

1990年9月25日現在

| 活動地名                      | 活動内容                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 | 支援団体                                                                                                                 | 担当者                                                                                                     |
|---------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 東京本部                      | 渉外、事業計画、資金調達、ボランティア調整、会計、総務、情報収集および広報等。<br>機関誌『トライアル・アンド・エラー』発行。<br>JVC説明会—毎月第1月曜日 午後6時～8時<br>毎月第2、4土曜日 午後2時～4時                                                                                                                                                                                                                                      | 全国社会福祉協議会                                                                                                            | 岩崎駿介（代表）<br>林 達雄（事務局長）<br>熊岡路矢、星野昌子、<br>前川昌代、山口誠史、<br>岩崎美佐子、富安光子、<br>今泉 恵、鈴木由子、<br>富安庸太郎、柴田久寿子、<br>高梨直樹 |
| 神奈川県<br>(JVC神奈川)          | 神奈川県内での渉外、事業計画、資金調達等を行う。<br>県内で行う「管洋志写真展」、恒例のポートウォークよこはまの準備をしている。<br>在日外国人の法的な側面を考える学習会の計画をたてている。                                                                                                                                                                                                                                                    |                                                                                                                      | 清水俊弘                                                                                                    |
| 日本国内                      | ●定住難民プロジェクト<br>9月9日、JVCボランティアが呼びかけて「インドシナ料理の会」の第2回：ベトナム編が行われた。ベトナム人の講師を囲んで16名が横浜市磯子区杉田のボランティア宅に集い、ベトナム料理と文化を学んだ。次回は11月、カンボジア編を予定している。                                                                                                                                                                                                                | ジャパン・タイムス<br>神奈川県福祉部<br>禅林寺龍華会基金、ケアハウスさくら苑、明るい社会づくり運動神奈川県協議会                                                         | 小野豪大、他約60人                                                                                              |
| エチオピア<br>(東ゴジャム州)<br>ビチェナ | ●ビチェナ緊急救援活動<br>東ゴジャム州、青ナイル峡谷沿いの低地斜面に住む7万人の干ばつ被災者に対して①フード・フォー・ワークによる食糧配給、泉の保護、環境保全、支道建設、②保健衛生教育と診療所への支援を行っている。<br>—配給に必要な食糧3,000トンのうち、957トンのカナダ政府から調達し、第1回目の配給を終えた。<br>—同時に、テーブル台地の縁から低地までの道作り（歩くための道）を、現在行っている。<br>—再三にわたる調査の結果、8月15日より近接地域21カ村を含め、7万2000人の被災者へ食糧配給を開始。同時に栄養失調児に対するプログラムも始まった。<br>●総合的復興促進（マーシャ村）<br>内戦のため昨年11月より中断している。<br>再開が待たれる。 | CRDA, WFP, 犬養道子・みどり一本運動、モラロジーMIRC, 東京グリーン・ウォーク、西本願寺、Tree for lifeの会、中部善意銀行、毎日新聞社会文化事業団、JVCカレンダー、メサイアコンサート、エチオピア救援バザー | 山田 盛、江原浩昭、<br>江原広美、田尻真由美、<br>寿賀一仁、Solomon,<br>Shikur, Ali,<br>Tekleyohannes,<br>Yodit                   |

| 活動地名                                                     | 活動内容                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   | 支援団体                                                                                                                                                                                                                                                | 担当者                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
|----------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <b>ソマリア</b><br>マガネイ・キャンプ<br>(ゲトー郡)<br>ハルバ・キャンプ<br>(ゲトー郡) | <b>●農業による自立促進</b><br>既存農場の状態について評価を行った。マガネイ地区の5農場では、従来からの土地の疲弊に加え、難民の一部帰還、難民支持政策の変更に伴うキャンプ周辺の治安悪化などから、難民出身の農民の大半が離農し、地元民は盗難を恐れてポンプを地元民の農場長の家に保管している。<br>ハルバ地区では、難民キャンプで食糧配給、医療、給水などが激減したこともあって、キャンプから30～50km離れた農場近くに移住する人が増加している。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      | UNHCR,<br>メサイアコンサート                                                                                                                                                                                                                                 | 磯田厚子, Siyad Mohamed Musal, Muhubo Mohamed Aden, Rashid Mohamed Rangale, Mohamed Alasow Owke, Hire Abdi Digale                                                                                                                                                                                                                                                  |
| ジャララクシ・キャンプ<br>(ヒラン郡)                                    | <b>●農業による自立促進</b><br>家畜プロジェクトの対象者を決定し、配給カードの全くない10家族にそれぞれ10頭のヤギ、ヒツジを支給した。<br>8月末に反政府軍がジャララクシの外国団体、国連、政府機関を襲撃。JVCも車、現金などを強奪された。反政府軍の撤退後、地元民により各NGO、国連の施設が襲われて、資材、備品、建物(トタン屋根、壁材、フェンス)などすべてを持ち去られた。<br>JVCはスタッフ一同けがもなく全員無事だった。現在、国連を含めてどの団体も外国人による活動は不可能で、JVCは2名のソマリア人シニアスタッフを除いて他のワーカーは解雇し、当分の間情勢を見守る体制である。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             | UNHCR,<br>R.I. Japan                                                                                                                                                                                                                                | 船川秀夫, 船川三貴子 Shuqri Abdi Ali Abdulahi, Mohamed Mohamud Mohamed                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
| <b>カンボジア</b><br>カンボット県<br>プノンペン市<br>カンダール県               | <b>●サンタビエップ技術学校/ワークショップ</b><br>車両による国内輸送が復興のために果たす役割を重視し、①ワークショップ(修理工場)の設立 ②自動車の部品等の供給 ③自動車整備士の養成を初期の目標として、1986年にこの事業を開始した。JVCは現地実施機関の運輸省自動車輸送公社と人材面、技術・理論面で協力し、第一期、第二期と訓練を行ってきた。<br>輸送公社には現在100台余りの日本製トラックがあり、JVCが部品を供給し、現地の自動車整備士が修理、メンテナンスに当たっている。<br>今までの教室は騒音が激しかったため、新たに教室棟を建設し、9月1日に落成式を行った。9月3日に入学式を行い、7日から授業を開始した。第3期の生徒は、JVCワークショップのスタッフ9人、孤児の研修生5人など、合計30人である。理論の授業は開校当時から教べんをとっているタック・カンと日本人スタッフ、及びノップ・ティムが担当する。<br><b>●RINE(ライン)プログラム(母子保健活動)</b><br>母親教育、危険な妊娠の発見と早期移送、分娩等に携わる助産婦の訓練や医療器具・医薬品の供給などを行う“母子保健”と、小児発育検診や検診で表出された栄養失調児のケアを行う“小児保健”活動を行っている。<br><b>●井戸掘り・給水</b><br>バットンバン、バンティミエンチェイの両県で、内戦により国内避難民となった人々のために20本の井戸を掘る。この緊急援助活動は7月から始められ、現在までにバットンで5本の井戸が完成した。<br>一方、通常の計画に沿ってコンボンチュナンで5本、カンダール県で5本、プノンペンで3本の合計13本が今年に入って掘られた。 | 創価学会青年平和会議、モラロジーマIRC、立正佼成会、日産労連、西本願寺、善興寺ダーナ基金、高岡寺族青年会、毎日新聞大阪社会事業団、明るい社会づくり運動神奈川県協議会、浄土宗東京教区青年会、国際保健協力市民の会(SHARE)、四日市商業高校、JVCカレンダー全日本仏教青年会、カリタス・ジャパン、「第1回カンボジア・クラシックコンサート」、真如苑、「武蔵野市100周年キャンペーン募金」、生協ひろしま、銀座ライオンズクラブ、メサイアコンサート<br>笹川平和財団『国際平和輸送サービス』 | 古西 勇, 馬 清, 杉江美子, 本橋 栄<br>「現地の実施・調整機関と主な担当者」<br>(運輸省)<br>国際局<br>Meas Semeth<br>自動車輸送公社<br>Thach Cang<br>ワークショップ<br>Am Deang<br>Nop Thim<br>Hget Sorn<br>Kham Bora<br>(保健省 母子保健局)<br>Ann Sarun 医師<br>保健委員会<br>Nhim Nhem 医師<br>プノンペン郡<br>保健事務所<br>Sam Sarung 医師<br>母子保健活動<br>Tui Kath<br>Mat Samon<br>(農業省 水利局)<br>The Iv Khim<br>井戸掘り活動<br>Hok Setha<br>So Sarin |

| 活動地名                                                  | 活動内容                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       | 支援団体                                                                                                                   | 担当者                                                                                                                                                   |
|-------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <b>タイ</b><br>バンコク事務所                                  | ①総務、会計、資金調達<br>②各機関（国連、タイ政府、日本大使館、各国民間援助団体）及び東京事務所、ラオス・カンボジア・ベトナムを含む、各プロジェクトとの連絡調整<br>③情報収集、広報活動 ④在タイ日本人との連絡調整<br>・タイ・日本民衆フォーラムのプレ・セミナーに参加。<br>・9月22日、インペリアルホテルで日本人会のバザーがあり、主婦ボランティアが参加。売上は22,943バーツだった。<br>●奨学金プロジェクト<br>プリムラのチャャブーンでの調査とクロントイスラムのNGO奨学金プロジェクトの実態調査を継続中。10月下旬のキャンプの準備中をすすめている。<br>●図書館<br>スラム青少年開発委員会が行う、スラム環境プロジェクト準備委員会に参加。<br>9月初めに3カ月の識字教室を終えた。また学校に行けない子供にも算数を教えている。 | 全国社会福祉協議会<br>メサイアコンサート<br>Tree for lifeの会、雄勝町町内寺院会、国際ソロプチミスト駿河、からし種モラロジー<br>MIRC                                       | Pornpimol Chaiboon,<br>Kamol Mingmuang,<br>大石道子、蘭牟田浩美,<br>Manas Torkan,<br>Samruay Jongyorklang,<br>Suntaree Lawsuan,<br>池島千津子、主婦ボランティア15名            |
| カオイダン<br>（カンボジア<br>難民キャンプ）                            | ●西崎憲司記念技術学校<br>ドライビングコースのための建物が、9月中旬に完成の予定。24日より全クラス新学期が始まった。生徒数は399人だが、バンタットキャンプがカオイダンに併合されたので、生徒の登録は継続する。                                                                                                                                                                                                                                                                                | UNHCR,<br>SV (Stichting Vluchteling)                                                                                   | Somyot Rattana-tham,<br>Sutthi Netprakhon,<br>井本勝幸、井本美奈、<br>岡村達司                                                                                      |
| バナニコム<br>（第三国定住待ち<br>キャンプ）                            | ●日本語学校<br>8月23日、ベトナム難民第2グループ7件7名が日本に出発した。それにより日本語学校のクラス数は1クラス（生徒数4名）になった。現在、日本に持ち帰りケースになっているラオス難民89件152名の定住許可はまだでない。                                                                                                                                                                                                                                                                       | IOM                                                                                                                    | 竹村雅義、熊沢ゆり、<br>Chowarite Duang-prom                                                                                                                    |
| ブリラム県                                                 | ●農村開発<br>チャャブーンでの環境プロジェクトのため、調査を継続している。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    | モラロジーMIRC,<br>JOFIC, JVC<br>カレンダー                                                                                      | Komain Soongsu-man<br>Thongkham Sumruengram                                                                                                           |
| <b>ラオス</b><br>ヱエンチャン<br>県<br>ボーリー・カム<br>サイ県<br>カンムアン県 | ●生活改善普及員養成プロジェクト<br>第2回養成コースが8月23日に終了した。<br>第1回養成コースの卒業生はすでに様々な普及活動を地方において展開している。カンムアン県では村人を対象にした母子保健や農業に関するショートトレーニングが、JVCの建設した県の母子センターにおいて行われた。<br>さらに、トレーニング講師を対象とした第1回東北タイ・スタディーツアーに引き続き、12月には第1回養成コースの卒業生を対象としたツアーを計画している。                                                                                                                                                            | UNDP,<br>UNIFEM,<br>庭野平和財団,<br>NVC, 日産労連,<br>ギャラリーイカ<br>ット、聖ヨゼフ<br>老人ホーム、老<br>人ホーム天寿荘<br>難民と地球の緑<br>を考える会、グ<br>ループ・カンガ | 谷山博史、北詰秋乃、<br>原田恵津子、<br>Thanongsi Solankum,<br>（ラオス女性同盟）<br>Khamone Phetdao-<br>heuan,<br>Khampone Saigna-<br>vong<br>ルー、メサイアコンサート、<br>JOCV, JVCカレンダー |
| <b>ベトナム</b><br>ホーチミン市<br>ハイフォン市                       | ●地域総合復興（南部）<br>7月からホーチミン市第8区の「ヒーボン」スクール、夜間学級、病院/保健所への設備改善支援を開始した。ビンチャン郡では病院への医療機器援助を行うとともに、「フォンフー」小中学校で3教室改築を開始した。<br>●帰還難民のための職業訓練（北部）<br>10月2日、UNHCRとJVCとの間のサブ・アグリーメントが調印され、10月29日JVCベトナムチームが現地に向かうことが決まった。                                                                                                                                                                              | UNHCR,<br>庭野平和財団                                                                                                       | 熊岡路矢、中野周二、<br>稲見 圭<br>Le Thanh Hai<br>Nguyen Trang Thu<br>現地の受け入れ機関<br>UNHCRハノイ<br>ハイフォン市<br>Nguyen Luong Trao                                        |



## JVCの活動とその目的に御理解を

▶ **JVCとは**—Japan International Volunteer Center  
は1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体  
です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっか  
けに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動  
を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形が  
できました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日  
本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等  
によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、  
宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境  
にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行います。

▶ **JVCの会員募集について**—会員は、総会に出席し、  
JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の  
活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができま  
す。会員の種別と年会費は以下の通りです。また会費には  
機関誌の購読料が含まれています。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円  
団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)

▶ **機関誌『Trial & Error』のみの購読について**

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

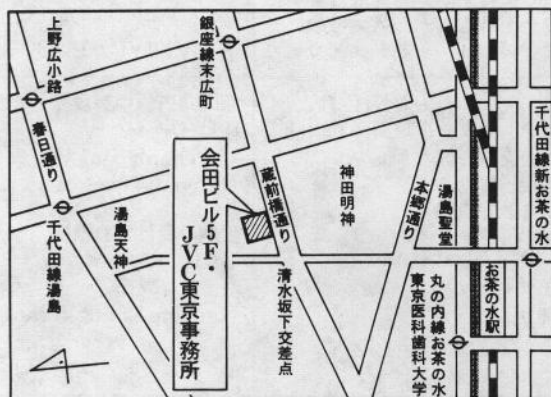
▶ **送金の方法**—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京5-48365 加入者名—JVC会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名—JVC東京事務所  
(住所、氏名、購読開始月をお書き添え下さい)

## 編集後記

▶ きっかけテーマを絞り込まないまま、バリから帰ったば  
かりで、すぐまたスリランカに行くという中村さんに、忙  
しい時間をさいて上京していただいて座談会に突入。ちょ  
うど一時帰国したばかりの山田氏、北詰嬢、田尻嬢をバツ  
と捕まえて原稿を依頼。2年ぶりにロンドンから一時帰国  
した内山田氏も「飛んで火にいる夏の虫」と捕獲。

無計画の割には仕上がりは上々、おもしろくまとまったの  
は、ご協力くださった皆さまのおかげです。あらためてお  
礼を申し上げます。(岩崎 み)



▶ **みなさまの募金が支えるJVCの活動**—救援活動をより充  
実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の  
20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- A. **アフリカ難民募金** (9月小計 287,000円)  
アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われま  
す。
- B. **グリーン・フォー・アフリカ募金** (9月小計 102,827円)  
アフリカの土壌回復、農業、植林等に使われます。
- C. **カンボジア募金** (9月小計 1,980,472円)  
カンボジア国内の復興のために使われます。
- D. **タイ募金(奨学金・スラム・農村)** (9月小計 62,000円)  
タイの人々の生活向上のために使われます。
- E. **ラオス募金** (9月小計 158,798円)  
ラオスの生活改善、プログラムに使われます。
- F. **ベトナム募金** (9月小計 0円)  
ベトナム帰還者及び国内復興のプログラムに使われます。
- G. **定住難民募金** (9月小計 600,000円)  
定住難民のための日本語教材費と家庭訪問員の交通費に使  
われます。
- H. **環境募金** (9月小計 7,000円)  
環境を守るためのプログラムに使われます。
- I. **JVC運営経費募金** (9月小計 62,000円)  
現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われ  
ます。
- J. **無指定募金** (9月小計 601,868円)  
▶ **送金の方法**—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。  
東京9-27495 (募金種目名をご記入下さい)  
加入者名—JVC東京事務所

## 犬養道子・「みどり一本」募金

東京0-212497 (9月小計 165名 1,106,513円)  
犬養道子さんの御厚意により、JVCに上記の口座を設け  
ました。この募金はエチオピアの植林プロジェクトに使  
われます。

Trial & Errorは再生紙を使用しています

1990年10月20日発行(毎月20日発行)

編集人 岩崎美佐子、林 達雄、前川昌代

発行人 林 達雄

発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC) 東京事務所

〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5階

☎03(834)2388 FAX:03(835)0519

Telex:7604025 JVCHQ UC

神奈川事務所 〒231 横浜市中区山下町2 産業貿易セン  
タービル9F (財)神奈川県国際交流協会内  
☎045(671)7082

印刷所 ㈱ベスト・プリンティング

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。